

Title	『建礼門院右京大夫集』前半部の構成
Author(s)	丹下, 暖子
Citation	詞林. 38 P.28-P.43
Issue Date	2005-10-20
Text Version	publisher
URL	https://doi.org/10.18910/67540
DOI	10.18910/67540
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

『建礼門院右京大夫集』前半部の構成

丹下 暖子

一 はじめに

『建礼門院右京大夫集』（以下『右京大夫集』と略す）は、題詠や定数歌的な歌群がある一方、時間の推移に従った日記文学的な側面も見られる作品である。その配列意図や構想については様々に論じられてきたが、中でも、前半部（2〜203）と後半部（204〜356）に多くの点で明らかな差異のあることは、成立説とも相まって特に指摘されるところである。したがって、『右京大夫集』を考察するにあたっては、前半部と後半部をそれぞれ一つのものとして捉え、見てゆくことが、まず必要となるだろう。

本稿での考察対象は、連想による配列を中心とする前半部である。前半部は、宮中に出仕し始めた頃（承安四年頃）、高倉院と中宮徳子の輝かしい姿を仰いでのお2番歌と、高倉院崩御（治承五年）を悼む202・203番歌が対応関係にあり、その内容も大半がこの期間の出来事であるため、完結性が見られる。この中では、四十首からなる題詠歌群（14〜53）について、

冒頭（2〜13）の高倉院と徳子をめぐる、「資盛との恋を体験する以前の、明朗な時期のものに限られている」詠歌と、題詠歌群以降の詠歌に差異があることから、「先行している筆録を締め括る意図をもって据えられている」とされ、構成上の働きが特に指摘されている。

このように、題詠歌群については、前半部の中での意味が夙に問われてきた。しかしながら、前半部には、その構成や配列意図が明らかではない部分も見受けられ、検討の余地があると思われる。

構成を明らかにする手がかりの一つとして本稿が着目するのは、前半部に多く登場する平家一門の存在である。前半部は、資盛を絶対的な追慕の対象とする後半部に対し、資盛に関する記述が限られている。資盛の詠として確実な歌も二首しかない。そのような前半部に大きな位置を占めるのが、資盛の近親をはじめとする平家一門なのであり、その存在には看過できないものがある。次節以下、平家一門についての考察を通して、前半部がどのような構成を持ち、それぞれの詠

歌を配しているのか、見てゆく。

なお、構成を検討することは、作品世界を考察することにもつながると思われる。本稿は、前半部の構成の一端を明らかにすることを目的とするものであるが、加えて、前半部がどのように捉えられるものなのかについても言及したい。

二 平家一門の検討 — 維盛と重衡の特異性 —

平家一門の存在は、どのように解されるものであろうか。『右京大夫集』における位置づけとして、野沢拓夫氏は「資盛関係の記事の前後をみると、必ずといってよい程、近親関係の記事があること」に着目し、平家一門を中心とした近親に関する記述は「絶対量の不足した資盛関係の記事を、回想の軸として各所に据えるための、いわば柱の補強」とされる。しかし、平家一門に関する記述は一樣ではなく、個々に検討を要するであろう。本稿では、前半部に登場する平家一門について、概観することから始めたい。

では、平家一門の前半部における登場状況を確認しておこう。下段の表1は、歌及び詞書ごとに、それぞれ登場する回数を数えたものである。平家一門と言っても、右京大夫と交わした贈答が記録された者、詞書に登場するだけの者がおり、『右京大夫集』に占める割合には差異がある。以下、順に見てゆく。

【表1】前半部における平家一門の登場状況

	通盛	知盛	清経	重盛	重衡	経正	忠度	時忠	宗盛	維盛	資盛	詠歌数	詞書に登場する数
	0	0	0	0	0	1	1	1	1	4	2		
	1	1	1	3	4	1	1	1	2	6	3		

※資盛については、資盛であることを明示した記述があるものについてのみ、数えた。すなわち、詠歌は作者表記のある11番歌、詞書（父おとどの御供）から判断できる76番歌の二首。詞書は上記の二首及び、資盛の父、重盛の熊野詣に触れる（父おとどの御供に、熊野へまゐる）158・159番歌の併せて三場面。

まず、詠歌数からは、資盛を凌ぐ四首が入り、詞書にも多く登場する資盛の兄、維盛が際立つ。維盛は『右京大夫集』に「歌もえよまぬ者」(96)とあり、事実、どの勅撰集にも入集することはなかった。歌人としての実績に乏しい維盛だが、『右京大夫集』に占める割合は小さくない。加えて、維盛の北の方と交わした贈答も二組(84・85、89・90)あり、右京大夫の維盛への関心の程が知られる。

維盛以外の人物の詠歌について見ておく。宗盛、時忠、忠度、経正の歌が、それぞれ一首ずつ採録されている。まず、宗盛との五節の櫛にまつわる贈答(59・60)は、親しい者同士の私的なやり取りといった趣のものである。しかし、宮中での行事を機縁とした贈答という点に、宮中の一場面の記録といった側面も認められよう。時忠との菖蒲につけての贈答(81・82)の場合は、右京大夫の返歌は中宮方を代表するものであり、女房という立場から見た宮中の記録と捉えられる。さらに、既に歌人として一定の評価を得ていた忠度(91・92)との紅葉につけての贈答、西八条を舞台に、平家全盛期を描く中の経正の一首(97)がある。

以上の四人の詠歌は、女房という立場での交流といった性格が強いようである。一方の維盛は、容姿(6・7)や恋愛問題(186~191)までもが話題となる点で、四人とは異なる。このような維盛については、次節以下で詳しく見てゆくこととする。

次に、詞書に目を向けてみたい。資盛の叔父、重衡が維盛に次いで多く登場している。他の人物は、その栄えるさま(57、58)を描き、友人、知人の恋の相手(74・75、164・165)、あるいは返歌をことづけた相手(87・88)として登場する。重衡の場合、次の一文に注意しておきたい。

〔この人〕〔重衡〕もよしなしごとをいひて、「草のゆかりをなにか思ひはなつ、ただおなじことと思へ」と、つねにいはいはれしかば、

濡れそめし袖だにあるをおなじ野の露をばさのみいかがわくべき(196)

重衡の発言としてであるが、重衡を資盛と「おなじこと」と表現する。この資盛と「おなじこと」という表現は、後半部になるが、維盛にまつわる回想の中にも用いられる。

また「維盛の三位中将、熊野にて身を投げて」とて、人のいひあはれがりし。「中略」「おなじことと思へ」と、をりをりはいはれしを、「さこそ」といへしかば、「されどさやはある」といはれしことなど、かずかずかなしともいふばかりなし。(214・215詞書)

この「おなじことと思へ」という一言一句違わない言葉は、現実の二人の言葉をそのまま記し留めたというよりも、執筆時に意識的になされた表現とは考えられないだろうか。勿論、二人から同様の発言はあったのであろうが、『右京大夫集』に記すにあたって、特に同じ表現を用いたものと思われる。

それは、前半部に二人が際立って登場することも関わるものである。表現の細部からも、維盛と重衡を資盛と近い存在として位置づけ、他の平家一門とは異なる存在として遇していることが窺えるのである。

では、以上のような平家一門をめぐる記述は、どのように配列されているのであろうか。前半部に名が見える平家一門について一覧にしたものが、以下に示す表2である。この表から、資盛を除く平家一門との交流が記されるのは、限られた箇所であること、そして、維盛と重衡のみが冒頭及び末尾に登場することが確認できる。

【表2】前半部に登場する平家一門と構成

高倉院 と徳子 をめぐ る交流 2 13	9 10	6 7	11 9 10 8	11 9 10 8	58 57 56	57	59 60	74 75	資盛 維盛 重衡 重盛 宗盛 清経 時忠 知盛 忠度 経正 通盛
平家一 門を中 心とし た交流 54 131	題詠歌群 (14 / 53)								
61 68									

ゆかり ある人 184 203	資盛・ 隆信と の関係 132 173	166 173	* 158 159	* 132 134	130 131	119 122	114 116	94 95	76 77
199 198	「秋のやまざと」十首								
190 188 186 191 189 187	：第五句目が「秋のやまざと」で終わる歌群 (174 / 183)								
196 192 197 195									
81 82									
87 88									
91 92									
96 94 97 95									
164 165									

※数字は歌番号。□は、その人物の詠歌であることを示す。例えば11は資盛の詠。
 ※資盛については、資盛と明示されていなくても、その関係に触れた詠歌であることが判断できるものは挙げる。
 * 135 / 163では資盛・隆信両者との関係が記される。うち147、153は資盛の詠かとされる。

このように、前半部に登場する平家一門を概観した時、維盛と重衡の待遇は特異なものであり、それは配列の上でも同様であることに気づく。以下、本稿では維盛と重衡に注目して考察を進める。

三 維盛と重衡 — 冒頭・末尾の位置づけ —

前節から明らかなように、維盛と重衡は前半部を考察する上で看過できない存在である。では、二人の名がともに見える冒頭・末尾を、二人が登場する場面を中心に見てゆくこととしよう。

まず、冒頭の維盛と重衡に注目する。9番歌から11番歌は、中宮方を代表する形で交わされた贈答であるが、資盛が初めて登場することから関心を集めてきた場面である。

近衛殿、二位中将と申しし頃、隆房、重衡、維盛

資盛などの殿上人なりし、引き具せさせ給ひて、白河殿の女房たちさそひて、所々の花御覧じけるとて、又の日、花の枝のなべてならぬを、花見ける人々の中よりとて、中宮の御方へまゐらせられたりしかば、さそはれぬ憂さも忘れてひと枝の花にそみつる雲のうへ人(9)

返事 隆房の少将

雲のうへに色そへよとて一枝を折りつる花のかひもあるかな(10)

資盛の少将

もろともに尋ねてをみよ一枝の花に心のげにもうつらば(11)

二重傍線部「など」とあることから、他の殿上人の存在が予想されよう。しかし、贈答を交わした隆房・資盛以外の殿上人では、維盛・重衡の名が見えるだけである。つまり、初めて登場した資盛とともに、特に二人の名が記されたということになる。

この三首の直前に位置する、故建春門院のために行われた御八講を記す8番歌では、維盛と重衡の存在が、さらに強調されていると言える。

故建春門院の御ために、御手づから御経書かせおはしまして、内裏にて御八講おこなはれし五巻の日、女院たち、後の宮々、三条の女御殿、白河殿など、みな御捧物たてまつらせ給ひし。そなたに縁ある殿上人、持ちてまゐりしけしき、おもしろくもあはれにもありしに、中宮の御捧物は、二枝を、宮亮ひげ、権亮これなど持たれたりしとおぼゆ。(「下略」)(8詞書)

この時のことを記録する『玉葉』安元三年七月七日条「捧物目録、付持人」には、次のようにある。

中宮、(袈裟一帖、亮左馬頭重衡取之、水精念誦、左少将時実朝臣取之(彼宮職事)、三衣宮一合、権亮右少将維盛朝臣取之)

◇内は割注

中宮徳子の捧物を持参した者として、維盛・重衡以外に平時実の名があり、『右京大夫集』は、時実について省筆していることが分かるのである。ここでも、維盛と重衡のみが特に記されたと考えられよう。

以上の二つの場面では、平家一門の中でも二人にのみ、右京大夫の視線が集約される形となっている点に注意される。冒頭は、特に二人のみを資盛とともに登場させようとする意識が顕著なのである。

さて、この二場面が位置するのは、2番歌から題詠歌群手前までの、「追想の内容も宮中の繁栄と、そこに奉仕できるわが身の幸福とが、強い宮廷讚美の心情に貫かれて語られ」ているとされる、徳子に出仕した女房としての意識が極めて強く浮かび上がる歌群である。勿論、8番歌からの維盛・重衡との関係も、その枠組を超えるものではない。この歌群の中では、6・7番歌にも維盛が登場するが、やはりここでも「少し立ちのきて見やらるるほどに立たれたりし」維盛の華やかな姿を右京大夫が遠くから見るといふ、離れた関係にある。つまり、冒頭では、維盛と重衡も、高倉院と徳子を中心に繁栄する宮中を彩る存在として、登場しているのである。

次に、維盛・重衡・資盛にまつわる歌が連続して並ぶ、前半部の末尾を見てみよう。

まず、維盛との六首の贈答歌(186〜191)は、右京大夫が維盛の恋愛問題に口を挟んだもので、冒頭の遠くから眺める存

在とは異なる。この詞書には、「わが物申す人のこのかみなりし」とあることに注目される。「わが物申す人」、すなわち「資盛」の兄である人と、特に資盛とのつながりを強調する形で維盛が示されているのである。

通常、『右京大夫集』では、登場する人物は名前や官職で記される。例外としては、恋愛関係におけるもの、すなわち関係の始まった後の資盛を「物思はせし人」(76・77)、隆信を「色好むと聞く人」(135・138)などと記すものがある。維盛の場合も、「権亮維盛」(6・7)、「維盛の少将」(126)、「維盛の三位中将」(214・215)といった具合に記されており、末尾の場合のみ、特殊と言える。この資盛との結びつきが意識された呼称は、末尾の構成意識とも関わるため、注意しておきたい。

続く192番歌からの六首は、重衡にまつわる詠歌である。192番歌から195番歌では、右京大夫達女房に対して、「れいのあだごとままことしきことも、さまざまをかしきやうにいひて」、「はてはおそろしき物語りどもをしておどされしかば」と、冒頭から一転して、右京大夫と親しい重衡の様子が詳細に綴られる。さらに196・197番歌では、二節で確認した資盛の「ゆかり」、資盛と「おなじこと」といふ表現が見える。

以上の十二首に続くのが、資盛との関係における独詠(198、199)である。「おもひ消てども消たれざりけり」(198)、「なにとなく言の葉ごとに耳とめて恨みしことも忘れぬかな」

(199)と、いずれも資盛との関係を断ち切れないものとした、後半部の追慕の念につながるものである。

このように末尾では、配列上、維盛と重衡が資盛と結びつけられている。加えて、二人は、その呼称や「ゆかり」、「おなじこと」といった表現からも、資盛の縁者としての面が強調されており、右京大夫の親しい相手として、やり取りが繰り広げられている。

ところで、この傾向は末尾全体を通してのものでもある。

順に「ゆかりある人」(184・185)、維盛(186〜191)、重衡(192〜197)、資盛(198、199)、母(200・201)、高倉院と徳子(202・203)と、右京大夫と特に近い人物にまつわる詠歌が配されているのである。徳子に出仕した女房としての交流を記す冒頭に対し、末尾は右京大夫と特に「ゆかり」ある人物でまとめようとしたことが分かる。

なお、この「ゆかり」を基調とした末尾の配列は、後半部への連続を意識してのものではないだろうか。維盛と重衡は、後半部において、都落ち後の末路が揃って記される人物であり(212〜215)、右京大夫の母及び、高倉院と徳子にまつわる詠歌は、それぞれ母の死、高倉院崩御を契機としてのものである。こうした詠歌の配列、内容からは、資盛追慕を中心とする後半部の世界とのつながりが見える。

さて、ここで注目されるのが、「ゆかりある人」との贈答の直前に位置する174番歌から183番歌の、第五句目がいずれも

「秋のやまざと」で終わる十首の歌群である。この「秋のやまざと」十首については、稲田利徳氏⁸⁾により、『山家集』にある西行と寂然の贈答の影響が指摘されているが、構成上の働きについて触れられることはほとんどなかった。しかし、維盛・重衡をはじめとする人物配列に注意した時、題詠歌群同様、一つの区切りとして存在していると考えられるのではないだろうか。この十首を区切りとして認めた時、末尾には右京大夫の特に「ゆかり」である人物、資盛と「おなじこと」とする人物を配してゆくという構成意識の一端が明らかになる。そして、この末尾は、構想上の断層が想定される前半部と後半部をつなぐためのものであることが顕著となる。「秋のやまざと」十首は、西行歌の撰取例としてのみならず、構成を考える上でも看過できない歌群なのである。

以上のように、前半部の冒頭・末尾には維盛と重衡のみが資盛と特に結びつけられて登場する。この三人は、二節で確認した「おなじこと」という表現で結ばれる人物でもあった。配列でも同様のことが浮かび上がる。冒頭・末尾は、本節で見てきた通り、明らかな構成意識に基づいてまとめられているのである。

四 維盛の位置づけ

三節では、冒頭・末尾の維盛と重衡を見てきた。ここで、さらに維盛について考察してゆくこととする。

平家一門の中でも、維盛は『右京大夫集』に最も多く登場する人物である。右京大夫は維盛をいかなる存在と見ていたのであろう。維盛の容貌を話題とした6・7番歌が示唆的である。この詞書では、維盛について「二藍の色濃き直衣、指貫、若楓の衣、その頃の単衣、つねのことなれど、色ことに見えて、警固の姿、まことに給物語いひたてたるやうにうつくしく見えし」と、その服装を詳細に描写する。同様の描写は、資盛の姿を「枯野の織物の狩衣、蘇芳の衣、紫の織物の指貫きて、ただひきあけていりきたりし人のおもかけ、わがありさまには似ず、いとなまめかしく見えし」と記した114番歌詞書にも見える。このような服装描写は、実は『右京大夫集』では限られた人物にしかなされないものである。数少ない服装描写の中、維盛についても資盛同様の描写がなされたのであり、維盛という存在の位置づけの特異性が窺えよう。

両者の関係について、『平家物語』は次のように述べる。

〔資盛〕「今はわれとてもながらふべしとも覚えず」とて、袖をかほにおしあててさめくと泣き給ふぞ、まことに理と覚えて哀れなる。〔資盛ハ〕故三位中将殿〔維盛〕にゆゆしく似給ひたりければ、見る人涙をながしけり。

（巻第十 三日平氏）

もっとも、『平家物語』の記述を事実として、そのまま受け取るわけにはいかないが、維盛と資盛は「ゆゆしく似」ていたと語られる存在であった。右京大夫もまた、維盛を特に資

盛と近い存在として、注目していたとも考えられよう。

さらに維盛について見てゆこう。維盛は、平家一門との一連の交流を締めくくると、最も華やかな西八条の遊び（94、97）にも登場する。

春頃、宮の西八条に出でさせ給へりしほど、大方にまゐる人はさることにて、御はらから、御甥たちなど、みな番にをりて、一、三人はたえずさぶらはれしに、花のさかりに月明かりし夜を、「ただにやあかさむ」とて、〔権亮〕〔維盛〕朗詠し、笛吹き、〔経正〕琵琶ひき、御簾のうちにも琴かきあはせなど、おもしろくあそびしほどに、内より隆房の少将の、御文もちてまゐりたりしを、やがてよびて、「下略」（94、97詞書）

ここでは、引用した場面が続いて右京大夫と歌のやり取りを交わすこととなる、維盛・経正・隆房の三人の名が見える。しかし、傍線部のようにあることから、中宮徳子の甥である資盛をはじめとする、平家の人々の集うものであったと考えられる。

この詞書との類似が指摘されている『平家公達草紙』には、次のようにある。

高倉院の御時、大宮宰相中将実宗、左宰相中将実家、中将泰通、隆房、維盛、弟の資盛、源少将雅賢など、常に打ち連れて遊ぶ人々なりけり。治承の比にや、月も花もさかりなる夜、例の此人々、皆具して遊びけるに、〔中

略) 大宮宰相中将、琵琶^{ひば}弾き、少将^{しょうしょう}資盛^{すけもり}、箏^{そう}、泰通^{たいつう}、維盛^{いせい}、笛^{ふえ}、隆房^{りゅうぼう}、笙^{しょう}の笛吹^{ふえふ}きはせて、常^{つね}よりもおもしろきに、(下略)

(東京国立博物館本 東北院の遊び)

西八条と東北院という場所の違いはあるが、『右京大夫集』とほぼ同様の遊びが行われた折のものと考えられ、両者の記述には関わりも想定される。『平家公達草紙』の場合は資盛の名も見えるわけだが、『右京大夫集』が特に記したのは、維盛と経正であった。

経正については、西八条の遊びを振り返る時、不可欠な存在であったと思われる。

うれしくもこよひの友の数にいりてしのばれしのぶつまとなるべき(97)

と申ししを、「われしも、わきてしのばるべきことと心やりたる」など、この人々の笑はれしかば、「いつかはさは申したる」と陳ぜしもをかしかりき。

経正の詠歌はその場の話題となったのであり、西八条の遊びを記す時、省略することはできなかつたと考えられる。一方の維盛はどうであろう。

権亮(一維盛)は、「歌もえよまぬ者はいかに」といはれしを、なほせめられて、

心とむな思ひいでそといはむだにこよひをいかがやすく忘れむ(96)

「光源氏のためしも思ひ出でらるる」(214・215)と言われた維

盛だが、歌は得意とせず、苦心したようである。ここでは経正の方が中心となる。しかし、右京大夫は平家全盛期の華やかな一場面を記す時、維盛についても触れるのである。

また、維盛は宮中を退出した右京大夫が、かつての日々を懐かしむ四首(123~126)の中にも名が見える。

となりに庭火の笛の音するにも、としどし、内侍所の御神楽に、維盛の少将、泰通の中将などのおもしろかりし音ども、まづ思ひ出でらる。

きくからいとどむかしの恋しくて庭火の笛の音にぞ泣くなる(126)

宮中を懐古する中に、維盛以外の平家一門の名が挙がることはない。維盛が、右京大夫の宮中での日々において、強く意識される存在であったことの窺える一首である。

以上、三節より前半部の維盛の登場場面をすべて見てきた。改めて、維盛は『右京大夫集』において、重要な位置を占めることが確認されよう。

このような維盛について考える時、興味深いのが、先に見た『平家公達草紙』などである。『平家公達草紙』は、平家全盛期の逸話を中心に、都落ちをめぐる悲話まで記す。その中でも、維盛にまつわる話が多く取り上げられているが、維盛は主に平家の栄えるさまを描いた逸話に現れる。また、後白河法皇の五十賀を記録した『安元御賀記』でも、維盛の舞の素晴らしさは強調され、欠くことのできない存在として登

場する。¹²⁾ 両作品では、維盛が中心的な存在なのである。このことは、『右京大夫集』において、平家一門の中でも維盛が際立つ存在であることと共通する。

事実、五十賀の舞の練習場面を記した『玉葉』にも、「次青海波二人、維盛、成宗、帯剣糸鞋出_二庭中_一、相替出舞、其以優美也、就_レ中、維盛容貌美麗、尤足_二歎美_一」（安元二年正月二十三日条）とあり、維盛は耳目を集める存在であった。

この『玉葉』が記録する維盛像は、平家の栄華に主眼を置く作品において、特に脚光を浴びることとなったのであろう。そうした結果が、維盛に関する記述の多さとも関係するのかも知れない。つまり、維盛は、平家の栄華の象徴として描写される存在であったとも考えられるのである。

『右京大夫集』の場合の維盛には、勿論、資盛の兄という関係が常に背景にあるだろう。しかし、同時に、『右京大夫集』周辺の平家の栄華を描く作品のように、前半部における維盛もまた、平家の全盛期、すなわち徳子に仕えた日々象徴的存在として登場したのではなかったか。維盛が登場する場面からは、前半部に積極的に平家の栄えるさまや宮中での日々を記録し、描こうとした面のあることも見えてくるのである。

五 宮中での日々

ここまで、維盛・重衡に着目して『右京大夫集』を考察し

てきたが、二人にまつわる記述はすべて、宮中、もしくはそれに准ずる場でのものであった。このことは、二人にまつわる記述が、宮中の記録という側面も有するものであることを示している。そこで本節では、前半部において、宮中での日々がいかなるものであったのかを確認してゆくこととする。まず注目されるのが、冒頭の2番歌と末尾の202・203番歌である。

高倉の院御位の頃、承安四年などいひし年にや、正月一日中宮の御方へ、内の上、わたらせ給へりし、おほんひきなほしの御姿、宮の御物の具召したりし御さまなどの、いつと申しながら、目もあやに見えさせ給ひしを、物のとほりより見まゐらせて、心に思ひしこと。

雲のうへにかかる月日のひかり見る身の契りさへうれしとぞ思ふ（2）

「高倉院かくれさせおはしましぬ」と聞きし頃、見なれまゐらせし世のことかずかずにおぼえて、及ばぬ御事ながらも、限りなくかなしく、「なにごともげに末の世にあまりたる御事にや」と人の申すにも、雲のうへにゆくすゑとほく見し月のひかり消えぬと聞くぞかなしき（202）

中宮の御心のうち、おしはかりまゐらせて、いかばかりかとかなし。

かげならべ照る日のひかりかくれつつひとりや月のかき曇るらむ(123)

波線部のように、いずれも高倉院に始まること、傍線部のように、高倉院を「日」、中宮徳子を「月」に譬える共通した表現が見えることから、対応関係にあることが指摘されてきた箇所である。この配置が意図的なのものであることは、明らかであろう。前半部は、高倉院と徳子という、右京大夫の宮中での日々を最もよく象徴する人物に始まり、終わることとなる。この配列からは、徳子に出仕した女房としての日々に対応する強い意識が窺える。

徳子にまつわる記述、宮中に関連する記述は、前半部に数多く見られる。中でも、宮中での日々への強い意識は、退出をめぐっての記述に顕著である。

心ならず宮にまるらざるにし頃、れいの月をながめて明かすに、見てもあかざりし御おもかげの、
「あさましく、かくてもへにけり」と、かきくらし恋しく思ひまゐらせて、

恋ひわぶる心をやみにくらすせて秋のみやまに月はすむらむ(123)

宮中退出後、月から徳子の「おもかげ」を連想し、懐かしむ。この123番歌から四首連続して、「宮にて、つねに近くさぶらふ人の笛にあはせなど遊びしこと」(124)、「内侍所の御神楽に、維盛の少将、泰通の中將などのおもしろかりし音ども」

(126)を思い出し、「宮の御産」(125)という慶事に加わることでできない悲しさが綴られてゆく。前半部において、宮中という場は右京大夫に強く意識されるものであって、資盛との関係のみに収斂しない世界が浮かび上がる。

なお、宮中退出に触れる記述は、資盛及び、右京大夫のもう一人の恋人、隆信との関係を記す一連の歌群の中にも見える。

雲の上もかけはなれ、そのちもなほときどきおとづれし人をも、たのむとしはなけれど、さすがに武蔵鎧とかやにて過ぐるに、「中略」反故どもとりし
たたむるに、いかならむ世までもたゆむまじきよし、
かへすがへすいひたる言の葉のはしに書きつけし。
ながれてとたのめしことも水茎のかきたえぬべき跡のかなしき(162)

宮にさぶらふ人の、つねにいひかはすが、「さてもその人はこの頃はいかに」といひたりし返事のついでに、

雲のうへをよそになりにし憂き身には吹きかふ風の音も聞えず(163)

傍線部のように宮中退出に触れてはいるが、ここで中心となるのは資盛・隆信との関係であって、宮中への思いではない。123番歌からの四首とは、性質の異なることが明らかである。

ところで、この162番歌、163番歌の前後は、前半部の中でも

宮中に対する意識が極めて薄いことに注意される。この二首とも関わる隆信との関係の始まりが記された135番歌から、三節で注目した「秋のやまざと」十首直前の173番歌までに注目してみよう。すると、宮中を舞台とする詠歌は、「豊の明りの頃、上西門院女房、物見に車二つばかりにてまゐられたりし」とある贈答(164・165)に限られることが見えてくる。

この贈答には、左注という形で次のように続く。

など申ししをりは、ただあだごとこそ思ひしを、それゆゑ底の藻屑とまでなりしを、あはれのためしなさは、よそにてなげきし人に折られなまししかば、さはあらざらまし。かへすがへすためしなかりける契りの深さもいはむかたなし。(164・165左注)

傍線部のように、都落ち後の小宰相と通盛の末路が記されている点で、他の記述とは性質が異なり、同様に扱うことはできないため、本稿での考察はひとまず措く。すると、残りはすべて、宮中とは異なる場での詠歌となることに気づく。つまり、資盛・隆信両者との関係が綴られてゆく中には、宮中を舞台とした歌が一切、見られないのである。

本節で見てきた記述から、右京大夫に宮中での日々に対する強い意識のあったことが窺えるが、前半部全体を通して見られるものではないことが分かる。このことは、構成の問題とも関わりと考えられる。次節で、前半部の構成について考察する。

六 前半部の構成

本稿では、『右京大夫集』における維盛と重衡の位置づけに着目し、まず「秋のやまざと」十首に題詠歌群同様の働きが認められることを述べた。そして、前節で、二人をはじめとする人々との交流の場となった宮中に関連する記述が、前半部に均一に見られるものではないことを確認した。

加えて、前半部に大きな位置を占める、維盛をはじめとした平家一門全体に目を向けた時、宮中関連の記述と同様の傾向が指摘できる。すなわち、二節の表2からも明らかのように、平家一門の名も、前述の164・165番歌に登場する通盛を除くと、隆信との関係を述べてゆく135番歌から「秋のやまざと」十首までの間に一切、見えないのである。

ここで注目されるのが、135番歌直前の三首である。

はじめつかたは、なべてあることもおぼえず、いみじう物のつつましくて、あさゆふ見かはすかたへの人々も、まして男たちも、知られなばいかにとのみかなしくおぼえしかば、手習ひにせられしは、

散らすなよ散らさばいかがつらからむしのぶの山にしのぶ言の葉(132)

恋路にはまよひいらじと思ひしをうき契りにもひかれぬるかな(133)

いくよしもあらじと思ふかたにのみなぐさむれどもなほ

ぞかなしき(134)

「はじめつかたは」と、資盛との関係の始まった頃を述べるが、既に資盛との関係は61番歌において始まっている。

なにとなく見聞ぐごとに心うちやりて過ぐしつ、なべての人のやうにはあらしと思ひしを、あさゆふ、女どのやうにまじりて、みかはす人あまたありし中に、とりわきてとかくいひしを、あるまじきことやと、人のことを見聞きても思ひしかど、契りとかやはのがれがたくて、思ひのほかに物思はしきことそひて、さまざま思ひみだれし頃、(下略)(61詞書)

つまり、資盛との関係は一度述べられていたのであり、132番歌から134番歌は、関係の始まりについて、再度、触れたことになる。

この三首については、今関敏子氏が「時間の逆行」と捉えられ、「恋のはじめの資盛への純粹で一筋な思慕の情を強調し、ちょうど同じ頃に起きた隆信との恋愛沙汰へ筆を及ぼす周到な準備」であると、135番歌から始まる隆信との関係に記述の意図を見出される。また、谷知子氏は、三首を積極的に隆信関連歌群の中で位置づけられ、「主軸は資盛との関係にあって、それと同じ頃という形で、あくまでも脇役的な役割において、隆信の話は語られている」とされる。このように、132番歌から134番歌については、続く隆信・資盛両者との関係について記す歌群との関わりの中で考察されてきた。

しかしながら、宮中での日々と平家一門との交流という、前半部の主軸の一つとなり得るものに注目した時、この三首を隆信に関する記述の中でのみ、位置づけることはできない。この三首を境として、前半部全体の記述姿勢が異なっているのである。

まず、題詠歌群以降の54番歌から131番歌までには、維盛をはじめとした平家一門との交流が、宮中を舞台として繰り広げられる。一方、132番歌からの三首を境に、「秋のやまざと」十首直前の173番歌までには、平家一門は登場せず、宮中に対する意識も希薄である。そして、前者では資盛のみが記されるが、後者では資盛・隆信両者について記される。つまり、『右京大夫集』の軸となる資盛との関係をめぐっても、大きな差異が浮かび上がるのである。132番歌からの三首を区切りとして、その前後は異なる意識によって構成されているのであり、この三首は新たな書き出しを意図して記されたものと考えられるのではないだろうか。

従来、前半部の構成に関しては、四十首からなる題詠歌群のみが注目されてきた。しかし、「秋のやまざと」十首も、題詠歌群同様、末尾を「ゆかり」ある人々で構成するために据えられたもの、資盛との関係の始まりを再度記す132番歌から134番歌も、記述姿勢の差異の明示を図って意識的に記された区切りと解されるのである。

以上が、本稿で指摘する構成上の区切りである。ここで、

改めて前半部を見てみよう。二節の表2に示したように、大きく四つのまとまりが存在することに気づく。

まず、冒頭の2番歌から13番歌は、高倉院と徳子をめぐる交流を軸として、宮中での華やかな日々を描いたものである。資盛との関係も徳子の女房として接したものに過ぎず、冒頭は宮中出仕当初の感懐が中心となるものと考えられる。次に、末尾の184番歌から203番歌は、「ゆかり」ある人でまとめられている。この配列は、資盛追慕を主題とする後半部へのつながりが意識されているものであろう。

そして、題詠歌群と「秋のやまざと」十首との間が、前半部の中心となる部分である。資盛との関係が、始まりから疎遠になるまで展開してゆくのも、この部分においてである。加えて、この中でも132番歌からの三首を境に、作品世界の異なることが、本稿で注目した平家一門や宮中での日々に関する記述の配列から明らかになる。

以上、前半部の構成と、そこから窺える構成意識の一端を見てきた。連想による配列を中心とする前半部であるが、確固たる構成を持ち、それぞれの詠歌が配されているのである。

七 おわりに

本稿では、主に人物配列に注目して、前半部に従来指摘されてきた題詠歌群以外にも、構成上の区切りが想定できることを述べてきた。では、そこに展開する世界はいかなるもの

であろう。

一つは、中宮徳子の女房としての日々である。ここでは、平家一門の華やかな姿が描き出され、高倉院と徳子を中心とした平家全盛期の様相が、右京大夫の目を通して女房日記的に記録される。資盛との関係も、この交流の中で捉えて良いように思われる。もう一つは、資盛・隆信両者との関わりである。この二人をめぐる歌群については、『源氏物語』などの影響も指摘されており、女主人公として、虚構を交えながら物語的にまとめたものではなからうか。浮かび上がった二つの世界については、別に考察の機会を設けたいが、いずれも、資盛の存在のみが記述の軸となるものではない。二つの世界がそれぞれ明確に構成され、配列されていることから、は、むしろ、それぞれに独立した主題を持つようにも見える。

田淵句美子氏は、『右京大夫集』の外に見える右京大夫の生涯、和歌活動を考察され、跋文(37)に触れて、右京大夫は『千載集』『新古今集』『新勅撰集』の三つの勅撰集が編まれる時を見、歌林苑、六条家、平家文化、新古今時代、承久の乱後の時代など、いくつもの和歌圏や時代を体験している」のであり、「長い生涯の中には、作品テーマや、歌風、題材、形式などを異にする、いくつつかの家集、ないしある程度おおまかにまとめた詠草が存在したか」と推測される。前半部に浮かび上がる二つの世界も、右京大夫に資盛追慕にと

どもらない家集編纂や詠草整理の契機があった可能性を示唆するものであろう。後半部との関係から、資盛へと収斂するかのよう位置づけられることもあった前半部であるが、その構成からは、また異なった二つの作品世界も窺えるのである。

注

(1) 『右京大夫集』の成立説としては、一括成立説、二期成立説などがあるが、二期成立説では、前半部と後半部の間に摺筆を認めるものもある。摺筆を想定しないまでも、構想上の断層は大方が認めるところである。なお、成立説については、野沢拓夫氏『建礼門院右京大夫集』研究の展望と問題点(『女流日記文学講座』第六巻 平成2年 勉誠社)にまとめられている。

(2) 井狩正司氏「建礼門院右京大夫集構想論のための覚書(一)」第一四番以下四〇首の題詠歌の配置の意図をめぐって(『語文(日大)』15 昭和38年6月)。他、後藤重郎氏「建礼門院右京大夫集題詠歌群に関する一考察」(『名古屋大学文学部研究論集』55 昭和47年3月)、芝尾仁氏「建礼門院右京大夫集の題詠歌群試論―収集の方法と配列の意図について―」(『中世文学』25 昭和55年12月)など。

(3) 「建礼門院右京大夫集管見―前半の主題と構想―」(『語文(日大)』51 昭和56年5月)

(4) 後半部でも、平家一門のうち、特に維盛と重衡を追憶する歌のみが連続して配されており(212〜215)、二人の特異な位置づけが窺える。なお、維盛と重衡の二人が対となることについては、秋

山寿子氏「二人の三位中将―重衡と維盛をつなぐもの―」(『重記文学の系譜と展開』平成10年3月 汲古書院)に、二人が「官職上いわばペアを組んできた」との指摘がある。

(5) 久保田淳氏「建礼門院右京大夫集評釈(三)」(『国文学』13 15 昭和43年12月)は「右京大夫には重衡・維盛ばかりが目について、時実が眼中になかったので、殿上人は二人、従って二枝と誤って記憶されたのか。」とし、樋口芳麻呂氏「建礼門院右京大夫集の発端」(『日本文学の伝統と歴史』昭和50年1月 桜楓社)は「馴染みの薄かった時実はいつのころから捨棄されてしまい、念頭にのぼらなくなる」とされる。

(6) 注2、井狩氏前掲論文。

(7) 「秋のやまざと」十首は、右京大夫が友人の一人、「宮にさぶらひし雅頼の中納言の女、輔どの」にあてた贈歌であるが、その返歌については「かへしも、たはぶれごとのやうなりしを、ほどへて忘れぬ」とある。『右京大夫集』に、返歌を記さないことを特に断ったものは他にはなく、ここでは贈歌十首を歌群として据えるため、返歌の省略を特に断ったものと考えられよう。

(8) 「西行の家集と「建礼門院右京大夫集」」(『中世文学研究』8 昭和57年8月、のち「西行の和歌の世界」平成16年2月 笠間書院)

(9) 『右京大夫集』において服装描写がなされるのは、高倉院(2)、中宮徳子(2、3)、建春門院(3)、維盛(6・7)、資盛(11)。

(10) 渡辺真理子氏「建礼門院右京大夫集」と「平家公達草紙」(『福岡教育大学国語国文学会誌』16 昭和48年12月)、藤田一尊氏「平家公達草紙」の成立に関する一考察―「建礼門院右京大

夫集』を資料として―」（『日本文学研究（大東文化大）』27 昭和63年3月）など。

(11) 注10、渡辺氏前掲論文は、『平家公達草紙』の記述は「第三者が、遊びに加わった者の記録―日記や風聞などを主材料とし、『建礼門院右京大夫集』の西八条邸における風流事の記述を参考にして手を加え、現存の詞書を作った」ものである可能性を指摘される。稿者も、実際には別の機会に行われたものであっても、両者の関係には密接なものがあると考え。

(12) 『安元御賀記』定家本、類従本と『平家公達草紙』（松永記念館本・青海波）については、伊井春樹氏『安元御賀記』の成立―定家本から類従本・『平家公達草紙』へ―」（『国語国文』61―1 平成4年1月、のち『物語の展開と和歌資料』平成15年12月風間書房）が、「定家本を増補改作して類従本が成立し、さらにそれに手を加えたのが『平家公達草紙』」という関係にあり、増補改作の過程で、平家の栄華のさまが特に加えられていることを明らかにされている。維盛に関する描写も、類従本において一層誇張される傾向にある。

(13) 今関敏子氏「建礼門院右京大夫集に於ける月―徳子の存在及び星に関連して―」（『国文』49 昭和53年7月、のち『中世女流日記文学論考』昭和62年3月 和泉書院）など。

(14) 「日記文学の時間―解体和組み換えをめぐる―」（『帝塚山学院大学日本文学研究』23 平成4年2月）

(15) 谷知子氏校注 和歌文学大系23『式子内親王集／俊成卿女集／建礼門院右京大夫集／艶詞』解説（平成13年6月 明治書院）

(16) なお、54番歌から131番歌、132番歌から173番歌に見える資盛関連の記述の配列に注目した時、いずれにおいても関係の始まりから

疎遠になるまでが順を追って辿られる。それぞれ一つのまとまりとして構成されていたことを示唆するものではないか。

(17) 樋口芳麻呂氏「隆信と右京大夫の恋」（『国語国文学報』30 昭和51年11月）、家永香織氏「建礼門院右京大夫集』試論―二つの恋をめぐる―」（『国語と国文学』72―3 平成7年3月）、谷知子氏「建礼門院右京大夫集』と『源氏物語』」（『源氏物語の魅力を探る』平成14年7月、のち『中世和歌とその時代』平成16年10月 笠間書院）など。

(18) 「建礼門院右京大夫試論」（『明月記研究』9 平成16年12月）

【使用テキスト】

『建礼門院右京大夫集』：新潮日本古典集成、歌番号も上記に拠る

『玉葉』：国書刊行会

『平家物語』：新編日本古典文学全集

『平家公達草紙』：岩波文庫

（たんげ・あつこ 本学大学院博士前期課程）